有島武郎研究

―『或る女』の成立をめぐって㈣―

宮野光男

一

本論は、いくつかのキー・ワードを分析することによって、『或る女のグリンプス』の田鶴子像と、『或る女』前篇の葉子像とを解明、比較することを目的とするものである。このことは、これまでに続けてきた「有島武郎研究――『或る女』の成立をめぐって㈠、㈡、㈢―」〔梅光女学院大学国文学研究第四、五、六号、昭43～45　以下㈠㈡㈢と称する〕において考察した田鶴子像、葉子像を側面的に確認することであり、両者の比較を通して『或る女のグリンプス』と『或る女』の間に主題変更の事実が存在しているか否かを検証する一つの手掛りを得ようとするものである。また、内容的には、「有島武郎研究―『三部曲』のうち未定稿および定稿「サムソンとデリラ」「〔大〕洪水の前」と『或る女のグリンプス』との関係を中心に―」〔広島大学近代文学試論第九号、昭46・8〕において指摘した三つの仮説のうちの一つ、『三部曲』のうちの第一、第二の戯曲の未定稿と定稿との間にみられる人間像の変化が、田鶴子像と葉子像との間にも存在するのではないかという問を実証する試みでもある。

本論は、田鶴子、葉子の全体像の把握のための一つの試みであるが、そのための基本的な作業の一つとして、田鶴子と葉子の日常的な言動をその人間関係において捉え、分析比較するところから始めてみたいと思う。このような作業のためには、対校本の存在がその前提となるが、今は紙幅の関係でそれを示す余裕がない。そこで対校本の発表は他日を期することにし、本論では主としてキー・ワード抽出による分析を試みることにしたいと思う。

二

『或る女のグリンプス』『或る女』前篇を通読して、まず印象的であることは、田鶴子も葉子もともに感情の起伏の激しい女性として描かれていることである。とくにそれは笑う場面と涙する場面において顕著である。彼女らの笑いかた、泣きかたにはさまざまの様態があり、けっして一様ではないが、一応かたちの上に現われた笑いは約七〇ヵ所、涙は約二〇ヵ所もあり、しかも各章に散在してい

て、この作品のほとんどすべての場面が田鶴子と葉子の笑いと涙とで進展していると言っても過言ではない。たしかに、笑いも涙も、もっとも原初的な生理的現象として説明できるものから、より意識的な、言葉に代る表現までを包括するところの感情の身体的表出である。それゆえに、作品における人物造形の過程で、もっとも人間的な様相を付与するための具体的な方法として、笑いと涙とを用いたと考えることもできるし、内面的な心的葛藤、あるいは根源的な喜びや願望などを人間的に表出するための方法として、象徴的に用いたと考えることも可能である。いずれにせよ、そのことには自ら一つの傾向性が付与されていようし、象徴的表現であるという意味において人間像の特色ともなっているはずである。さらに付言すれば、笑いも涙もともに相手を予測した感情表出でもあるから、関係を表わすもっとも原初的な態度として位置づけることもできよう。田鶴子像、葉子像を明らかにし、彼女らの、作品における人間関係の特色を解明しようとする本論の目的を果すためのキー・ワードとして、笑いと涙とがまず取り上げられるゆえんである。(註一)

＊　＊　＊

田鶴子〔葉子〕〔両者共通の場合、以下このように表記する〕の笑いは、意識的な――多くの場合他者を意識した――笑いと、無意識的な、より本心に近いものとに大別することができる。

意識的な笑いについては、たとえば横浜の旅籠相模屋で、古藤に、

〔思ひきり〕泣きたい時でも|〈に〉〔知らん顔をして〕笑つて（ばかり）通してる〈居〉ると、こんな（、）私見たいな気まぐれ者になるんです。〔五章〕〔引用文は『或る女』を底本としている。（ ）内は『或る女のグリンプス』だけにある語または文を、〔 〕内は『或る女』だけにある語または文を示している。|〈 〉は、|を引いた『或る女』の語または文が『或る女のグリンプス』では〈 〉のように表現されていることを示している。以下、この方法による〕

と、自分の笑いについて説明しているところがあるが、これは田鶴子〔葉子〕の笑いの背後に涙のあることを、そしてまた、元来涙によって表わすべき心情が、多くの場合笑いによって偽装されて表出されている事実を物語っているところである。このような他者を意識した笑いが、偽態としての笑いであるところにその特色を見ることができるが、これは一方において非常に挑戦的であると同時に、他方において非常に自己防禦的な様相を呈しているのである。笑いの背後に隠されている涙が何に由来するのかは、涙の分析によって明らかにされることであるが、かねてから、人の前では絶対に涙を見せまいと努めてきた田鶴子〔葉子〕であるということは、涙することによって秘めておかねばならぬ本心――裸の魂が顕わにされてしまうことに対する本能的な恐れがそうさせたと考えられるし、それほどまでに田鶴子〔葉子〕の本心が内面的なものであり、他者にはけっして触れたくないものであったであろうことを推測できるところである。だから、その偽態としての笑いが自己防禦的色彩を色

濃く持っていることも当然のことなのである。この自己防禦を目的とする偽態の笑いは、多くの場合演技の笑いとして表出されている。冒頭部分の横浜行の列車の中の木田〔木部〕との再会によってひき起こされた狼狽が「自信ある女優が喜劇の舞臺に〔でも〕現〈顕〉はれるやう〈様〉に、軽い微笑を右の頬だけに浮べ」〔一章〕ることによって、ものの見事にかき消されているところなど格好の例ということができよう。

ところで、攻撃は最大の防禦なり、という古めかしい格言を引き合いに出すまでもなく、攻撃と防禦とは本質的には同じ基盤に立つ行為であるから、防禦の笑いが状況によっては攻撃の笑いとして表出されることもありうるわけで、田鶴子〔葉子〕の笑いが攻撃を上限とし、防禦を下限とするところの振幅上を揺れ動く、ひと連なりの心の動きの形象化されたものであろうことは容易に首肯することができるのである。母や田川夫人に対する「せゝら笑い」〔二章〕や「あざ笑い」〔一四章〕もさることながら、随所に見られる「微笑」の中にも、実は鋭い攻撃の刃が潜んでいるのである。そして、その攻撃が奏功したところでは、笑いは勝利者のする優越の笑いとして描かれているのである。たとえば木田〔木部〕に対して「白く〈い〉揃った〔美しい〕歯を見せて聲を出して笑った」〔二章〕〔②〜〜①〜〜は、『或の女のグリンプス』では①——②の順になっていることを示す。〕ところや、どのような仕打ちに合ってもひたすら田鶴子〔葉子〕を信じて疑わぬ木村への「嘲笑」〔一九章〕などがそれである。しかし、このような優越の笑いも、会心の笑いになると、そこには直接的に他者は存在しなくなるのである。これは会心、つまり得意の絶頂が、優越に比較してより本心に近い感情の表出だからであろう。岡の田鶴子〔葉子〕に対する傾倒ぶりを知ったときに、「暗の中で〈に〉眼をかゞやかして微笑〈ほゝゑ〉ん」〔一三章〕でいるところは、その意味において象徴的である。一人の人間を自家薬籠中にしえたと思う喜びの、偽わらざる表現だけに、他者には見せられない笑いなのである。会心の笑いが示しているように、より本心に近い心情の表出であると思われる無意識の笑いは、妹貞世に対する〔「骨肉のいとしさ」〕ゆえの「微笑」〔六章〕や、娘定子に対する〔「微笑」〕〔七章〕がそうであるように直接相手を目の当りにしていないところで発せられているところに特色を見い出すことができるが、これも涙が他人の前では流されていないことに関係があるということができよう。とくに、それが、倉地を思いつゝ、密かになされている笑いにおいて顕著である。

船医興録の部屋から聞こえてくる倉地の声に聞き耳をたてていた田鶴子〔葉子〕は、「うなだれ〔てゐ〕た顔を上げると〈ながら〉〔正面をきつて〕何（ん）と云ふ事なしに微笑を漏ら」〔一〇章〕している。これは、横浜出航以来、事務長倉地が一人の男性として不可抗的に田鶴子〔葉子〕にせまってくる存在として意識されてきたことを、つまり、倉地に対する思いの第一の顕現を表わしたものであるが「す〈直〉ぐよつとしてあたり〈四囲〉を見廻したが、我れに返つて〔自分一人きりなのに安心して〕いそいそと衣物を着かへ始〈はじ〉めた。」というように、その思いが、まさに、彼女の内面に潜む、根源的な願いであったことを示しているのである。

この倉地への思いが、一種の葛藤として認認されつゝ、しだいにその度合を深めてゆくさまが、一三章のデリリュームの状況における「恐ろしい笑〔ひ〕」として表わされている。この笑いが独り居の部屋の中で「後〈跡〉から〔後から〕（と）漲るやうにシーツ〈枕覆〉を濕ほ」すほどの涙とともに発せられているところに、やはり本心の露呈した笑いであることの一つの証拠を見ることができよう。病的とも思われるその激しさは、彼女の内面的葛藤のすさまじさと、その根の深さとを表出する一つの方法ということもできるのである。

このような思いを抱く田鶴子〔葉子〕に対して、倉地もまた、けっして無関心ではいられぬ者であることを知ったときに、思わずもらす「乳首を見〔せつけられ〕た子供〈赤兒〉のやうな微笑〔み〕」〔一四章〕は、まさに根源的な喜びの表現であり、かつまた、もっとも本能的な反応であるということができよう。ここには、田鶴子〔葉子〕の一切の虚飾と虚勢とを取り去った、いわば裸の魂が露呈した瞬間が活写されているのである。

事件としての一つの山場が一五章の倉地との関係の成立であるとするならば、一六章は、その事件に対する田鶴子〔葉子〕の、いわば総括の部分であり、作品の中でも重要な章であるということができる。とくに、倉地との関係の成立までの田鶴子〔葉子〕の過去――繰り返えし断片的に回想され説明されてきたその過去が、思いにおいても行為においても結局は倉地との関係の中に収斂し、彼女を拘束していた一切の絆から解放され自由になった喜びが、

葉子〈田鶴子〉はソファを牝鹿のやうに立〔ち〕上つて、過去と未来とを斷ち切つ〈絶つ〉た現在刹那の〔眩むばかりな〕變身に打ちふるひながら微笑〈ほゝゑ〉んだ。〔一六章〕

と表わされているところは、田鶴子〔葉子〕像理解のための『或る女』前半における一つの中心点ということができるのである。なかでも、有島が田鶴子〔葉子〕の恋の成就を「變身」という言葉で云い表わしていることは注目に値するところである。なぜならば、それが独り密かになされた笑いをともなって表わされていることからも、彼女の内面にある本心の表出であることを知ることができ、しかも、変身という事実を通して、「時々鏡に映る自分の顔を見やりながら〈と見合せて〉堪へ切れないやうに窃み笑ひを」〔一六章〕する田鶴子〔葉子〕を描くことによって、倉地に対する期待が、完全に全うされたことを暗示しているからである。とくに葉子の場合〔「「今朝から私はこんなに生れ代りました御覧なさい」といつて誰にでも自分の喜びを披露したいやうな氣分」〕を、〔「體中を擽るやうな生の歓びから、やゝもすると何んでもなく微笑が自然に浮び出ようとした。」〕〔一七章〕というように、会心の笑いで表わし、それをそのまゝ田川夫妻に対して〔「顔中を蠱惑的な微笑みにして挨拶」〕〔一七章〕することのできる、自信に満ちた葉子へと変化させているのである。このことからみても、有島が、この変身という言葉とその内容について、相当意識的に重要な意味あいをもたせて形象化していることを推測することができるのである。

さて、ここで問題になることは、田鶴子〔葉子〕をして、このよ

うに変化せしめた倉地への期待の成就ということが、いかなる内容をもったものであったか、ということであろう。それを知るためには、田鶴子〔葉子〕のより内面的な自己認識にもとづく願いを知らなくてはならない。そこでひとまず笑いの分析を離れ、より本心の表出を可能にしていると思われる涙の分析を手がかりに考察を進めてみたいと思う。

三

『或る女のグリンプス』『或る女』前篇にみられる涙の場面は、数量的にみると笑いの約三分の一ていどであって、『或る女』後篇における笑いと涙との関係と対称的である。もち論、ここで涙をキー・ワードとして取り上げるのは第二章で述べたような基本的な条件もあるが、それに加えてかなり意識的に、涙が二重の限定を加えて描かれており、田鶴子〔葉子〕の本心を知るためには好都合であるように思われるからでもある。

二重の限定とは、第一に、ほとんどの涙が、意識的に人のいないところで流されているということである。笑いがそうであったように、相手のいないところでなされる感情表出は、より本心に近い。そのことを有島は、

葉子＜田鶴子＞は小学校に通つてゐ＜居＞る時分でも、泣きたい時には〔、〕歯を喰ひしばつて〔ゐて〕、人のゐ＜居＞ないところまで行つて〔隠れて〕泣いた。涙を人に＜前で＞見せるといふの＜事＞は（一種の）卑しい事に＜僞善と＞しか思へなかつた（のである）。〔中略〕然しその夜に限つては＜今夜だけは＞葉子＜田鶴子＞は誰の前でも〔素直な心で〕泣けるやうな氣がした。〔誰かの前でさめ〴〵と泣いて見たいやうな氣分にさへなつてゐた。しみ〴〵と憐れんでくれる人もありさうに思へた。〕（人から憐れんでもらふ事がそう馬鹿〳〵しい事でなく思はれた）。〔一二章〕

と書いている。このことは、一方では勝気で我慢強い女性であることを表わしていると同時に、他方では人から憐れまれることに対する屈辱感への嫌悪の情がこめられているように思われるのである。田鶴子の場合と葉子の場合とでは、憐れみに対する感じかた、期待のしかたが異ってはいるが、ともかく、その前提として、普段は憐れまれることの内的必然性、つまり弱者であり敗者であることを顕にすることへの本能的な防禦の姿勢を読みとることができるのである。このことから推測するに、彼女自身、本当は自分が憐れまれるべき存在であることを、誰よりもよく知っているのではないかと思われるのである。それは、古藤の木村宛書簡の中で、「あの人は可哀さう＜相＞な人の癖に〔、〕可哀さう＜相＞がられるのが＜事の＞嫌＜きら＞ひな人らしいから」〔一九章〕と説明されていることでもある。先に笑いの分析において引用したデリリュームの状態の場面を、もう一度思い出してみよう。とくにその場合の涙の原因が問題なのである。

青年を憐れむ自分は事務長に憐れまれてゐ＜居＞る（。）〔ので

はないか。始終一歩づつ上手を行くやうな事務長が一種の憎しみを以て眺めやられた。」（胸につき上げて來る憎しみ、）嘗〈曾〉て味つ〈嘗め〉た事のないこの〈一種の〉憎しみ〔の心〕を葉子〈田鶴子〉はどうする事も出來なかつた。〔一三章〕

憐れみ、それは本来愛の同義語として用いられる言葉である。しかし、時としてそれは勝者の優越の笑いの変形でもありうるものである。今、田鶴子〔葉子〕が感じとっているものは明らかに後者であろう。そして、愛を希求するその激しさが報われないときに憎しみをもって応えるという、いわゆる愛憎相反の世界が展開しているところである。それと同時に田鶴子〔葉子〕は、自分が倉地から憐れまれていることを知り、いやというほど自己の内部に潜む憐れまれるべき状況を思い知っているのである。そのことは、涙の受けている二重の限定の第二すなわち「悲哀」と「淋しさ」とに関連づけられていることを明らかにすることによって、さらに明確にすることができるのである。

一五章における倉地との関係の成立の場面で、田鶴子〔葉子〕は「今まで味（は）つて來〈た〉すべ〈凡〉ての悲哀よりも更（ら）に殘酷〈殘虐〉な悲哀が」「胸をかきむしつて襲つて〈せばめるやうに侵して〉來た」ことを覚え、「俯伏しになつ〈倒れ〉たまゝ痙攣的に激しく泣き出し」てしまっている。悲しみと涙とは元来直結した感情表出である。しかし何が悲しいのかという問に対しては、答はけっして一様ではないが、ここで田鶴子〔葉子〕のかつて味ったこともないような残酷な悲哀のその原因は、憐憫によって圧倒されてしまったことに由来しているということができよう。一五章の事件としての田鶴子〔葉子〕と倉地との関係において、ただ倉地の「野獣のような assault」の前に屈伏せざるをえない自らを見い出したときに、まさに絶望的な悲哀を感じているのであるが、愛のない憐憫の前に屈伏するということは、自らの敗北を認めることに他ならないわけで、田鶴子〔葉子〕の悲哀は敗者の悲哀、敗れたことのもたらす悲哀であるということになるのである。このような屈辱的な状況を予測しながら、なぜ倉地に一種の期待をもって近づいたのかといえば、それは彼女の「淋しさ」に原因を求めることができよう。人のいないところで流す涙であるということが象徴的に表わしているように、田鶴子〔葉子〕の涙の背後には、その状況の前後を分析することによって、常に淋しさが、ある時には親しい者の不在感を伴って、またある時には漠然とした孤独感というかたちで忍び込んでいることを知ることができるのである。このような涙のうちに見られる淋しさは、田鶴子〔葉子〕の内部にあって根源的な痛みとして、たえず内部から脅かしている孤独の、感情的表出に他なるまい。淋しさが孤独の日常的様相であることは、すでに㈢において指摘したところであるが、この存在における根本的な孤独状況が実は田鶴子〔葉子〕の、他人に一番知られたくない事実であり、攻撃と防禦の笑いは、そのことが明らかになることを恐れる者の保身の業であるということもできるのである。

孤独――それに耐えられぬ者としての不安とともに――は、その意味において田鶴子〔葉子〕の存在の原点を解明するための本来的な意味でのキー・ワードであり、さらに詳細に検討しなくてはなら

ぬ必然性を見い出すことができたということができるが、そのことは、㈠、㈢の考察のための方法論と、本質的に一致するところのものなのである。

四

作品の世界における田鶴子〔葉子〕の現在が、淋しさに満ちたものであることを、涙する場面の前後でかなり意識的に説明していることはすでに指摘したところであるが、それが、たんなるムードではなく、生の根源に存在する本質的な状況認識であったことが、一六章の倉地に期待する者であることの内的必然性として委細を尽して述べられている。このあたりの事情に関しては、田鶴子像の解明を試みた㈠においてすでに述べたところであるが、田鶴子〔葉子〕が「（美しい男の眼を追つて見たり）〔乳母の家を尋ねたり〕突然大塚の内田に遇ひに行つたりして〈を尋ねても〉見たり」することの原因を、有島が孤独――「荒磯に一本流れよった流木」以上の、「一〈ひと〉ひら風に散つてゆく〈水におし流されて行く〉枯葉以上の」――に求めているところは、ぜひ再びとり上げなければならないのである。なぜならば、「人から人に歓楽を求めて歩」く生活の中に孤独を癒やすものは何も見い出すことはできず、かえって「不安」によって「底知れぬ憂欝の沼に」蹴落されてしまう田鶴子と同様葉子もまた、この人間存在の根底に横たわる孤独と不安とを克服することを、もっとも基本的な願として持った存在であることを指摘しなければならないからである。

田鶴子像と葉子像との差の有無を解明する過程において、まず明らかにすることのできることは、その自己認識の内容が、ともに孤独と不安とに苛なまれる人間像として形象化されているということであるが、つぎに問題になることは、その否定的状況を、いかに克服しようとしているか、その可能性を人間存在のいずこに見い出そうとしているかということである。

すでに㈠で指摘したように田鶴子は、その解決を征服者たらんとするところに求めているのである。しかもそれは、より強力な〔「自分を征服し得るもの」〕〔一六章〕への憧憬を内容としていた。ここには、自らの可能性を信ずる人間の姿を見ることができるが、田鶴子の、この自らのうちにある可能性追究の姿勢は、いわば自律的人間像の完成を求める生きかたを形象化したものであるということができよう。このことは、さらに人生を戦う田鶴子像を、戦い系列の語――征服、捕虜、勝利など――の分析を通して明らかにすることができるのである。

さて、人間の可能性を信じ、文字通り征服者となることを志向して生き続けようとしている田鶴子に対して、葉子の生きかたはどのようなものであろう。先にも述べたように、発想の原点としての孤独、不安は、田鶴子と同様であるが、それを克服する方法として、征服者であろうとしていないところにその特色があるということができよう。葉子は「乳母を尋ね――内田に遇ひに行く」ことによって癒そうとした孤独と不安の思いが満たされぬまゝに〔「思ひ餘つて又淫らな満足を求爲めるめに男の中に割つて這入る」〕〔一六章〕のである。この部分における葉子の生きかたの説明からは征服・

被征服の論理は消滅してしまっており、そのかわりに「淫らな満足」を求めるという、いわば姦淫の論理が前面におし出されてくるのである。このことはすでに指摘されているように、葉子の肉欲への憧憬という観点からとりあげることのできる特色である。たしかに葉子は田鶴子に比べて肉欲のかった女性として描かれている。倉地に対する期待はもち論のこと、男性一般に対する期待も肉欲の次元で顕わにされている。しかし、それが、いわゆる肉体関係の中に性的結合にのみ確かさの根源を求める一種の快楽主義者への転換という観かただけで葉子像の特色を云い表わそうとすることは困難であろう。なぜならば、もしそうであるならば、憐れまれることによって屈辱を感じたり、まして肉体関係が成立したところで悲哀の涙を流す必然性は全くないはずだからである。葉子は肉体的結合の背後に存在するものを求め、それの欠落していることを敏感に察知したからこそ、それに堪えられずに涙しているのであろう。つまり葉子における淫らさ、姦淫とは、彼女の内面の要求を赤裸に顕現化したものに対する、既成の倫理観からする評価に他ならない。このような血の通わぬ律法主義的裁断は、倉地との関係において、身をもって否定してゆかねばならぬ古き世の因襲なのである。このように考えてくると、ふたたび、葉子が倉地との関係を通して求めているものはいったい何であるかを問わねばならないのである。以下、主として戦い系列語の分析を中心にして、この問題を考えてみたいと思う。

五

一五章の倉地との関係成立の場面と、一六章のその事実に対する総括の部分とを重ねあわせてみると、一つの興味深い事実を見い出すことができる。それは、田鶴子にとっても葉子にとっても、ともに最高の喜びの表現である変身の微笑が、それぞれの文脈からすると全く逆の状況認識によって成り立っているということである。

まず田鶴子の場合から見てゆこう。

田鶴子が待望していたもの、それは自らが征服者となることであった。しかも被征服者もその瞬間たえず再生し、再び彼女に襲いかゝってくる不死身の存在であることを必要とする永遠の争闘の関係を求めていたのである。だから、彼女の喜びは、元来そのことの実現を前提とするものであるはずである。ところが、一五章末尾における田鶴子と倉地との関係は、それとは似て非なる敗北の関係以外の何ものでもないのである。有島はこの矛盾を「變身」という言葉で説明している。田鶴子の変身の具体的内容は「〔一〕木村はどうした。〔二〕米國はどうした。〔三〕故國の親類はどうした。〔四〕今まで田鶴子を襲ひつゞけて居た不安はどうした。〔五〕征服者の誇りはどうした。〔六〕嘗て知らなかつた捕擄の受くる蜜より甘い屈辱。」〔一六章〕と記されている。〔一〕から〔三〕まではともかく、〔五〕、〔六〕は、まさに田鶴子のイメージを逆転させる変貌である。征服の論理は倉地との出合によって、ものの見事に覆えされてしまっているのである。そして「生に固着した」〔一七章〕、「底のない」〔九章〕不安は、もは田鶴子やにはまったく存在しないというのである。このことは、孤

独が完全に解消されたことを意味しているのであるが、倉地に対して感じてきた（「敗者の苦痛」）〔一四章〕を払拭し去ったこの田鶴子の内的変化はその意味において「主体的変心、つまり内面的自己否定」を意味しているということができるのである。

さて、田鶴子の変身に対して、葉子のそれはどのようなものであろう。田鶴子の変身の具体的内容と異っている点をまず列挙すると、「〔三〕養つて行かなければならない妹や定子がどうした。〔五〕人に犯されまいと身構へてゐたその自尊心はどうした。そんなものは木葉微塵に無くなつてしまつた。倉地を得たらばどんな事でもする。どんな屈辱でも蜜と思はう。倉地を自分獨りに得さへすれば…。」となっている。

〔三〕は一応おくとしても、この〔五〕の内容の変化は、実は、一五章末尾に書き加えられた部分、〔「倉地がその泣き聲に一寸躊つて立つたまゝ見てゐる間に、葉子は心の中で叫びに叫んだ。「殺すなら殺すがいゝ。殺されたつていゝ。殺されたつて憎み續けてやるからいゝ。私は勝つた。何んと云つても勝つた。こんなに悲しいのを何故早く殺してくれないのだ。この哀しみにいつまでも浸つてゐたい。早く死んでしまひたい。…」〕に対応しているのである。この葉子の心中の叫びは、場面が場面だけに一瞬支離滅裂の感を催すところでもあるが、やはり有島の葉子像形象化のための計算によって描き出された特色であり、たんなる負け惜しみの論理で説明することができるような単純な論理ではないのである。

葉子が、ここで田鶴子と同様残酷な悲哀の涙を流しながら、しかも「勝つた」と叫んでいるところに、問題を解く鍵があるように思われる。田鶴子にとっては敗北を意味する倉地との関係が、葉子にとっては勝利としての可能性をもっているということを表わしているのである。このような、征服の論理の消滅した葉子の生きかたにあって「勝利」は何を意味しているのであろう。

かたちの上での敗北が、本質的には勝利であることを明らかにするためには、有島の描く人間関係、就中男女の関係の基本的成立条件を知らねばならないが、これを他の作品に求めるとすれば、同じ時期に書かれた『三部曲』の中の第二の戯曲『サムリンとデリラ』が浮び上ってくるのである。実は、この中に、「勝つた」と叫ぶもう一人の女性が描かれているのである。それはデリラという、一人のペリシテの女である。彼女の生きかた、愛の論理については、先に掲げた『三部曲』に関する拙論ですでに述べたところであるので詳述はしないが、サムソンから彼の力の根源の秘密を聞き出す前提として「私を愛しないものを私は動かす事は出來ません。」〔第一幕ペリシテ人の政廳〕といって、サムソンの愛の存在を必要としているところに、彼女が実は愛を希求する者であったことが示されているのである。したがって、デリラの「とう〳〵……とう〳〵……私はお前に勝つてしまった。」〔第二幕デリラの住家〕という心中の叫び声は、表面的には裏切りの成就を示しているが、内面的にはサムソンの愛を確認しえた喜びの声でもある。この逆説的な愛の論理が葉子の変身の具体的内容と本質的に特質であるように思われるのである。葉子に即して言えば、捕擄という状況は、見かけの姿であって、倉地の心が彼女の方に動いたという意味において――彼が葉子

を愛していなければそのようなことは起りえないのだから――葉子はすでに勝利者なのである。〔五〕の内容が、征服者の誇りの放棄から犯されることの是認に変化したのも、その後半の部分「倉地を…得さへすれば」という、倉地の側にかけられた比重の重さによって理解されることなのである。つまり、「犯されまいとする自尊心」の消失は、犯されるということの中に積極的な意味を見い出すこと、換言すれば、犯す者としての倉地の存在価値を見い出すことであり犯されることそれ自体を肯定することではないのである。

葉子の変身、それは愛される者であることの発見を意味している。そのことは当然愛する者としての倉地の変化を伴っているはずである。それがどのようなかたちで実現されているのかは検討されなければならないが、葉子の淫らな満足、つまり姦淫の論理を充足せしめうる存在としてであろう。後篇における倉地像理解のための一つのポイントをここに定めることができるのである。

ともあれ葉子の、倉地のうちに愛を見ることによって、孤独と不安との根本的な解決の可能性を見い出そうとしているところは、明らかに田鶴子とは異ったところであろう。

六

さて、事態は一七章においてもう一度新たな進展を見せている。有島は田鶴子を、価値体系の逆転の中で生きんとする変身をとげた女性として描ききってはいないのである。ようやく「手に觸れる」ことのできた「或る者」が、実は取るに足らぬ「幻影に過ぎ」ぬものであったと思いなし、それと同時にふたたび自らの敗北を思い、その状況を糊塗するための偽りの笑い、「強ひて左の手を軽く挙げて鬢の毛をかき上げ」てする「ほゝゑみ」を浮べなければならない女性に反転させているのである。そして孤独と不安とは、彼女をして「身の破滅」の到来を思はせ「胸から喉につき上げて來る冷い而して熱い球のやうなものを雄々しく飲み込んでも涙がやゝもすると眼頭を熱く潤して」しまうのである。この点に関しては葉子もまた同様である。しかし、田鶴子が、「自分に何等の注意も拂つて居なかった男に對してこつちから進んで情をそゝるやうな事をした自分」に対する嫌悪感を顕わにしていることからも明らかであるように、あくまでも敗北者としての屈辱感に苛なまれているのに対して、葉子は、自分に注がれた倉地の力、つまり愛が〔「自分を征服すると共に總ての女に對しても同じ力で働くのではないか」〕というように、愛の独占を願い倉地の彼女に対する行為が所詮は〔「出來心」〕であったのだと、その本質たるべき愛を疑う存在として描かれ、さらに、それにもかゝわらず、倉地に対する〔「斷ちがたい執着」〕を持った者であることが強調されているところが異っているのである。だから、一七章において、「こらへにこらへ〔てゐ〕た涙を〈の〉流れる（まゝ）に任せながら」「すゝり泣き」、やがては「さめざめと聲を立てゝ泣きはじめ」る田鶴子〔葉子〕のその涙は、初めて人の前で流された本心の吐露ではあるが、その内容は、田鶴子と葉子とでは全く異っているということができるのである。

ところで、一七章の後半において、倉地の田鶴子〔葉子〕に対する傾倒ぶりが明らかになることによって、さらに新たな進展を見せ

ている。田鶴子は（「倉地の態度にかすかな笑ひの種をさへ見い出す」）ことによって失地を回復し、勝利者となることができたことを確認しているのである。これは、明らかに変身の否定であり、田鶴子にとってはそれが虚像でしかなかったことを表わしているところである。それに対して葉子は、愛する娘定子の名を声に出して呼んでみても〔「その響の中には忘れてゐた夢を思ひ出した程の反應もなかつた」〕ことを思い知らされ、〔「どうすれば人の心といふものはこんなにまで變り果てるものだらう」〕と〔「定子を憐れむよりも自分の心を憐れむ爲めに涙ぐんでしま」〕うのである。つまり葉子は〔「倉地の心さへ摑めば後は自分の意地一つだ」〕というように倉地の愛に対する絶対的な信頼をよせる者として描かれることによって、変身を願望する者つまり愛の論理の実現を待望する者であることが示されているのである。ともあれ、それぞれのしかたにおいて、それは意識的には喜びであることにはちがいない。だから、それ以後の田鶴子〔葉子〕は、笑い、涙、あるいは戦い系列の語の分析からは否定的な姿は出てこない。むしろ「總ての事に飽き足〈満〉つた人のやうに、又二十五年に亘〈亘〉る〔長い苦しい〕戦に始めて勝つて兜〈鎧〉を脱いだ人のやう」な安堵感を伴った「微笑が唇の上を漣のやうにひらめき過ぎ」〔一八章〕ているのである。しかし、そのような安堵感の中に、ふと忍び寄る孤独と不安の陰の存在を見落すことはできないのである。それは、田鶴子が二人の妹の写真に触発されて流す悲哀の涙、あるいは写真の飾られていない定子を思い浮べることによって流されている葉子の涙の中に、一切のものを「空虚」と思わせ「何故こんなつかしい世に自分の心〈一人〉だけ〔かう哀しく〕一人坊ち〈孤獨〉なのだらう」〔一八章〕という思いとなってせまってきているのである。そして、さらには「底のない（やうな）〔物凄い〕不安」〔一九章〕が、ふたたび田鶴子〔葉子〕を襲っているのである。この事を思うとき、勝利者としての笑いが田鶴子〔葉子〕のうちに甦みがえっているということの本来の意味――内部に秘めた孤独の思いを象徴的に表わしているのだということもできるところであるが、倉地の存在が、田鶴子にとっても葉子にとっても「打ち勝ちがたい暗の力」として「魔王のやうに小動もせず蹲つてゐ〈居〉る」〔二〇章〕ように思われるというのも、自律的人間を志向する者の感じる限界状況の予感であり、また保証のない愛――人間の愛であるという意味において――のうちに生命の根拠を見ようとするときに生ずる不安が、すでに倉地という一個の存在を越えて、いわば運命的に、不可抗的にせまってくるさまを象徴的に表わしているところであろう。

田鶴子像から葉子像への変化、それは自律的人間から、新らしい愛の論理を待望する人間への変化を内容とするものであり、このことは、『三部曲』の第一と第二の戯曲の未定稿と定稿との間にみられた人間像の変化と、本質的に対応しているところでもある。もちろん、本論の田鶴子像、葉子像の解明が、片々たる二、三のキー・ワードの分析によって試みられた不完全なものであり、とくに、後半の、戦い系列語の分析は、紙幅の関係上、不充分であることは否めない。また孤独・不安については、㈠の分析を全面的に援用してしまったものだけにさらに分析の密度を深めてゆかねばならぬことは

云うまでもないことであり、さらには研究史的位置づけをしなければならないところでもあるが、一応の予測として、以上の素描を位置づけておきたいと思うのである。

註一　笑いと涙に関しては、『人間性の心理学』〔宮城音弥、岩波新書、昭43〕、『笑いについて』〔マルセル・パニョル・鈴木力衛訳、岩波新書、昭28〕、『笑』〔ベルグソン・林達夫訳岩波文庫、昭13〕、「女性の情緒」〔小林さえ子『女の心理』所収、福村書店、昭31〕『笑いの本願』〔定本柳田國男集第七巻所収、筑摩書房、昭37〕『女の咲顔』〔同前〕などから多くの示唆を与えられた。

註二　安永寿延「現代変身術入門――反シンボルへの志向――」伝統と現代第七号、昭46・6